

輝く未来を生きるために

宮城県 栗原市立若柳中学校 3年

星 日菜 (ほし はるな)

私の家族は六人家族です。父と母、祖父母、私、そして弟がいます。今年中学一年生になったばかりのかわいい弟です。私の小さい頃からの夢は、「弟とけんかをする事」です。よく考えてみれば自分でもおかしい夢だな、と思います。でも、夢はいまだに叶えられていません。

弟が生まれたのは、平成十五年九月です。弟が生まれると聞いた時、私は飛び上がって喜びました。私もそうだったのですが、黄疸がひどく、交換輸血を三回もしました。しかし、症状は改善せず、仮死状態に陥り、一命を取りとめました。が、脳に重い障害が残りました。脳性麻痺のため弟は話す事も、歩く事も、食べる事もできません。

家族と出かける際、弟は車椅子に乗っています。すれ違った人にじっと見られたり、小さい子が、

「あの子は、何で車椅子に乗っているの。」と質問する声が聞こえることもありました。うちの家族は普通じゃないのかな。外出する度に幼い心の中で疑問が膨らんでいきました。

私が幼稚園の時です。夏祭りに家族で出かけた際、私はたくさんの視線を感じ、たまたま母親に聞いたのです。

「何で皆、かなうのことじろじろ見るの。」

「皆、かわいいねって見てるんだよ。」

残念ながら、私にはそう感じられませんでした。誰もかわいいと言わないことを訴える私に、温かい笑顔で母は答えてくれました。

「恥ずかしいから、知らない人にかわいいって言わないでしょ。私達はその分、かわいいって言ってあげればいいんじゃないかな。」

車椅子だから、人と違うから見られることや、障害を卑屈に捉える生き方ではなく、母はありのままを大切に受け入れること、弟の良さをきちんと受け止める必要性を私に教えてくれたのだと思います。

私が保育所に通っている時から、母は弟が皆に受け入れてもらえるよう努めていました。弟を見たことのない友達が、弟を見て

「この子、生きてるの？人形？」

と聞いてきたのです。母は、小さい子にもできるだけ分かりやすく、説明しました。

「大丈夫、生きてるよ。弟なんだけど、ちょっと病気で歩けないの。」

その子は「よろしくね」と弟の手を握り、弟と友達になってくれたのです。私は心から嬉しく思いました。きちんと説明することで周囲の人達が障がいを理解し、温かく受け入れてくれるよう、母は心を砕いていたのです。

私は、金子みすゞさんの詩「わたしと小鳥とすずと」が大好きです。誰もが素晴らしい長所があり、「みんなちがって、みんないい」というフレーズに、勇気をもらえるからです。障がいがあっても、私達と同じように得意なことがあり、人に元気を与えることができる存在だと、私は思うのです。

弟のチャームポイントは笑顔です。音楽を聴いている時、周りにたくさんの方がいる時、弟の表情はとても嬉しそうです。私も学校であった出来事を話してあげるのですが、弟の笑顔を見るととても元気をもらえます。弟の笑顔は、人を癒し元気を与える力があります。

私が小学生の頃、母が迎えに来る時は必ず弟と一緒に迎えに来てくれました。私は弟が大好きなので、本当に待ち遠しい時間でした。私には、障がいのことを多くの人に理解してほしい、という願いがあります。父や母もちろん同じで、弟を子ども達の輪の中に積極的に連れて行きました。障がいをもつ人達と小さい頃から触れ合うことで差別や偏見がない地域や社会になってほしい、と常々考えているからです。栄養チューブや車椅子の弟を見て、友達の中には最初「気持ち悪い」と言う人もいました。しかし、私の迎えに母と弟が姿を見せる度に、弟の周りには笑顔と人の輪が生まれました。弟の頬や手に触れ、「かわいいね」と言ってくれる友達が増えたのです。弟のおかげで私は人気者でした。両親が心配した偏見の目で見られることやいじめは、全くありません。むしろ、弟を通して病気や障がいへの理解が深まったと感じます。

弟は、私の家族にとって宝物です。弟の名前には、無事に生まれてきますようにという両親の願いが叶うよう、切実な願いが込められています。障がいがあっても弟はどんどん交流の輪を広げ強く生きています。障がいを地域や学校、たくさんの方に理解してもらい支えてもらう日々を、私達は生きています。障がいを持つ人にももちろん人権があり、命の輝きに差はないのだと考えます。弟のように障がいがあっても、自分らしく、輝ける場所を求めて頑張る人を、私はこれからも応援したいと思っています。

誰もが安心して暮らせる社会のため、障がいのある人に寄り添う日々を、私達の本当の豊かさとして大切にしていきたいです。